

2011年6月5日、山形集会終了日にツアー参加者は仙台に移動し、夜、仙台の保育園の先生方と懇談会、翌朝、石巻のなかよし保育園を訪問しました。

仙台の報告会では、朝市センター保育園の園長安達先生より、センター保育園の震災当初の様子や、宮城県下の保育施設の状況を伺いました。3月11日には、保育園がビルの5階にあるということもあって、大きな揺れとともに電気が消えてしまい、お昼寝中の子どもも目覚めたそうです。揺れている間は「すぐに終わるからね」と声をかけ、その後、服を着せて、避難階を使って、赤ちゃんはだっこ、子どもたちは歩いて小学校へ避難したそうです。たくさんの方が集まり、みんなに守ってもらったそうです。

その後余震の続く中、ビルの5階では心配なので二階に部屋を借りて、段ボールを敷いて、保育を始めたそうです。ガスは止まっていたましたが、水道と水（二日後）は使えたので、炊飯は可能になり、お味噌汁とごはんを提供し、子どもたちはおかずのみを持参して登園してきたそうです。

宮城県下の状況は、海側と内陸でかなり大変さが異なるとのことでした。また、認可保育所の状況は早期に把握できたものの、120カ所ある無認可の情報についてはつかめていないということでした。

翌日は、ホームページからの呼びかけや、閉会集会での報告を聞いての参加者計35名で、石巻のなかよし保育園を訪問し、大橋園長からお話をうかがいました。私の手元のメモでは、お話の要旨は下記のようになっています。

「保育園には津波はきませんでした。その後下水があふれることによって、105センチ冠水しました。園舎二階でだいたいぶだろうと判断して、備蓄の食料、水のある、二階でお迎えを待ちました。バッテリーが切れると、非常灯まで消えて暗くなってしまいましたが『子どもたちにこわいおもい、寂しい思いはさせない』という思いで保育にあたったそうです。1歳児でも、保育者がいると普段通りに過ごすことができました。最後のお迎えは、1歳児の保護者で、3日後の日曜日の2時半に、ボートをつかってこられました。当時、道路は水で埋まり、翌日から自衛隊やボランティアのボートが行き交い、そのボートを呼び止めて乗せてもらったり、ボランティアの方に水を届けてもらいました。近所の人と二階同士で声を掛け合い、無事を確かめ合っていました。

5日後に水はひきましたが、黒いどろどろのものが残り、不衛生でした。保育室の泥を掻き出しましたが、電気がないため電話も使えず、自力で掃除をしました。その後、3月26日ようやく電気がきて、31日に卒園式をし、4月1日から通常保育をスタートしました。子どもたちは夜泣きをしたり、親も不安な様子でしたが、保育園で話すとお話するとお話を聞くと、子どもも友だち同士でいっしょにあそぶと笑い声が聞こえました」。

このお話をうかがったあと、いくつか質問をさせていただき、参加者や、参加者にたくされた全国の皆さんからの、子ども用半袖 T シャツをはじめ、さまざまな支援の品物を届けました。

その後、被災地を地元の保育士さんにアナウンスしていただきながらバスでめぐり、日和山公園から、石巻の街を見下ろしました。

門扉をひとつ残しただけで姿を消してしまった公立保育園の跡や、燃えた小学校、建ったばかりの立派な家の壁が落ちかけている姿などなど、テレビを通してみているときより、そこにあった生活を思い起こさせられながら、まわった街の印象は忘れられません。

石巻の街を眺めて思ったことは、一瞬のうちに街を、生活を破壊した、自然の圧倒的な威力と、もう一つは、そうした力とは対照的な人の地道な街を復元させようとする力でした。壊れかけた家の一軒一軒で、そこに残っている人がおられないかを探し、がれきの中に、かけがえのないものが残っていないかを確認しつつ、確実に、整備されていっている街の姿に、人の力を感じました。

被災地が、元の勢いを取り戻すまでは、長い長い時間が必要だと思われまます。その間、私たち保問研の支援も、途切れることなく息長く続けていきたいと思いました。